英文雑誌に投稿し国際学会に参加すべし

獨協医科大学 第2外科
窪田敬一

和文誌W' Wavesの依頼原稿として何を書くべきか、はたと考えてしまいました。前回は、“留学の勧め”という題で寄稿させていただきました。今回は、ふだん教室員に話していることを書かせていただこうと思います。和文誌W' Wavesに“英文雑誌に投稿し国際学会に参加すべし”というタイトルで寄稿することはいささか非常識かもしれませんが、この雑誌の特殊性から書ける文章と理解してお許しください。

私が初めて論文を書いたのは、卒業して10カ月が過ぎようとしていた、まだ国立小児病院で小児外科をローテーションしていた頃と記憶しています。生来文才がなく、しかも筆無精で整理整頓能力のない人間が、卒後1年も経過しないうちに症例報告であっても書こうなど無謀な話でした。しかし、人間にとって**“人との巡り逢い”**ほど大事なことはないということを知らされる良い機会となりました。最初の論文です。私もできる範囲で一生懸命調べて書き上げました。初心者にありがちな、“調べたことは何でも書きたい”との思いから、症例報告なのにやたら長い冗長な論文であったような記憶があります。しかも、ポイントは多少ずれていたでしょう。それにもかかわらず、当時の小児外科長先生（その後、東京大学小児外科教授になられました）および私の直属の上司が親切に校正して下さり、見事日本小児外科学会雑誌に掲載される運びになりました。その時の感激は今でも忘れることはできません。少し自惚れではありますが、自分でもやればできるのだということがわかりました。どんな些細なことでも、一つ達成することにより得られる自信は、かけがえのない財産だと思います。

その後、外科研修を積むうえで東京都内のK病院に派遣されることになり、3年3カ月過ごしました。外科研修に全力を注ぎましたが、珍しい症例にも遭遇し、症例報告を書く機会に恵まれました。急に書く能力が上達するわけがありません。やはり拙い長篇作となりました。ここでも論文指導に優れた先輩に出会い、適切な指導を仰ぐことができました。こうして昭和60年7月に東京大学第二外科に入局する時には、症例報告ですが5編の論文を完成するに至りました。

その後、スウェーデン留学も決まり、英文を書いてみたいと思い、一念発起して自力で書き上げました。投稿し、無事英文誌に採用された時の喜びは、筆舌に尽くしがたいものがあります。ちょうど留学中に掲載され、教室の先生方から“君はこういうことを研究してきたのか”と感心されたのを覚えています。やはり、国際的にお互いに理解しあうためには、英文論文でなくてはだめだと自覚した瞬間でした。留学中にも一生懸命書き、留学先の教授のご指導のお陰で、なんとか英文論文を自力で書くことができるようになりました。

帰国後現在に至るまで、それなりに努力して英文雑誌に投稿してきました。国際学会に参加しても、“君の論文を読んだ”という先生に会い、大いに意見交換できたのを覚えています。英文論文を書くには書き癖が大事です。日本語でも英語でも絶えず論文を執筆していることです。そして、impact factorが低くても投稿し、とにかく採用されることの喜びを知ること

です。それを知ったら、もうこちらのものです。次は、さらに上の雑誌を目指そうと頑張れるのです。

さて、臨床医には日本語であれ英語であれ論文を書く義務があると思います。自分がやってきた**臨床成績をまとめ、世に公表し批判を仰ぐ**。これは、客観的な立場から自分がやってきた臨床を評価される絶好の機会です。日本語の場合は日本国内でしか評価されません。しかし、英語なら世界中で評価されます。Reviewerのコメントを見ても、こんな見方もあったのかと“目からウロコが落ちる”思いをすることがあります。その分野の世界の権威が見てどう評価するかを知ることは、次の研究に大きな弾みとなります。

また、一流の雑誌は、必ず同じ分野を志している海外の先生は目を通しています。お互いに顔は知らないけど、名前とやっている仕事はよく知っているということがあるわけです。英文論文は書くだけでなく、その内容を**国際学会に参加して発表する**ことが大事です。日本人は英語が下手であたりまえで、恥じる必要はありません。その積み重ねで、国際学会に参加した折にお互いに知るところとなり、国際的な意見交換ができるようになるのです。日本の外科学会で国際的に有名な先生方は、皆さんそういう努力を積まれてきた方ばかりです。英語は下手であたりまえとは言いましたが、国際学会に参加するからには少し英語をbrush upしていくのも礼儀かなとも思います。私は毎日わかってもわからなくてもテレビで英語の報道番組を見るようにしています。英語は苦手だと感じたら、日頃から努力するべきでしょう。それがより良い意見交換を可能にすることになるのです。

一つ忘れてはいけないことがあります。英文論文といえども掲載された時点で、その仕事自体は3、4年前からされていたことだということです。決して最新の情報が得られるわけではありません。その点、国際学会では意見交換することで、今何をやっているのか最新の情報を得ることができるのです。

和文論文にはない大きな魅力を英文論文は秘めているのです。われわれは英文雑誌に投稿する意気込みを忘れてはならないのです。私は常日頃、医局員にこのようなことをとくとくと話し（多少嫌がられていますが）、少しでも英文論文を書く習慣を身につけさせるよう努力している次第です。はじめに述べましたように、論文を書くには、良い指導者に巡り会い、採用される喜びを知り、書き癖をつけることが肝要です。上に立つ者は口で書けと言うばかりではだめで、**自分が良い指導者なのか反省する**必要もあります。Motivationを持たせて頑張らせることが大事なのです。

いろいろ思うところ自由に述べさせていただきましたが、以上のようなことを念頭に置き、新天地で頑張っており、少しずつその成果はでてきていると感じています。最後に“英文雑誌に投稿し国際学会に参加すべし”で雑文を締めくくらせていただきます。